

平成 30 年 5 月 14 日

南の風 270

南部ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

前号で『戦闘意欲』を持つことの大切さに触れました。

コーチはチームに対して強い意志を持ち、燃えたぎる『熱』を伝播させ、選手の戦闘意欲を駆り立てなければなりません。それは、選手全員が「やらなければいけない！」という自分の問題として感じられるかどうかで決まると、私は思います。

どうすれば『熱』が伝わるのか。私の経験を書きます。

若い時（今でも？）の私のコーチングは、強権型リーダーシップの典型でした。よく言えば情熱家、悪く言えば一人よがりの猪突猛進。「俺についてこい」タイプでした。

常盤台時代の県の決勝でした。第3Qを終わって僅差でリードしていたのですが、ディフェンスが機能せず（マンツーマン）、相手チームに押され気味でした。4Qが始まる前にガードの選手が私の傍に来て、こう言うのです。「監督、ここは一旦ディフェンスをゾーンにしましょう」。私自身も「流れを変えなきゃ」と思った矢先でしたので、選手から「ズバリ」言われてドキッとしました。そして、次の瞬間周りの選手も呼応するように、「そうしましょう！」と言うのです。私は黙ってうなずくだけでした。

その後4Qはゾーンが機能し、選手が生き生きとプレイリードを広げることができました。

私は指揮を執りながら、不思議な気持ちでした。緊張感が消え、自然体で指示が出せたのです。子どもたちから、何か大きなパワー（熱の塊）をもらった感じがしました。

子どもたちのお蔭で、5回目の全国大会に連れて行ってもらうことができました。

試合が終わった後、勝ったうれしさもあったのですが、それよりも何よりも、4Qが始まる前のあの「監督、ここは一旦ディフェンスをゾーンにしましょう。」の言葉は、私にとって衝撃的なものでした。

「選手は試合の流れを感じながら、きちんと状況把握をして、ゲームを進めようとしているんだな」とつくづく感じさせられました。あの時の一言は忘れることができません。（昭和59年・1984年の出来事）

この試合を期に、自分の指導が変わった気がします。性格的に先頭に立ってチームを指導するやり方は変わらないのですが、大きな声を張り上げ興奮しながらも、どこか冷めた気持ちで客観的に試合を進めることができるようになりました。「今は選手に任せよう。」「ここは選手に聞いて見よう。」「ここはタイムアウトだな。」という具合に、冷静に指導できることが増えました。

ここで皆さんに伝えたいことは、『コーチと選手との適切な距離感』です。

私のように、いつも大声を張り上げ「俺についてこい」というタイプのコーチは、選手との距離をやや遠くして、「客観性を持って自分の声を聞く」ことに心掛けたほうが良いと思います。『熱』が伝わり過ぎると、選手によっては鬱陶しく感じることもあるからです。

一方、理論家と言われるコーチ（冷静に状況を捉え全体を見渡す能力のある人）は、選手との距離を近くしたほうが良いと感じます。なぜなら、ともすると選手に近づきがたい印象を与えかねないからです。自分が持つ『熱』が伝わりにくく、弛緩してしまうことがあるからです。ですから、自分が適切だと思ふ距離よりも近づいた方が、適度な緊張感を維持するためには良いのです。